

神戸大教育 稲垣 和子

戦後 20 数年を経過して私共の衣生活の実態は相当変遷してきた。特に生活環境も快適に改善せられ新繊維があらわれ戦前との様相には大差がみられる。その為にどのような着衣状態であるか実情を調査し、被服構成学上、被服衛生学上、被服材料学上、更に住生活上の立場から着衣状態を検討してみる必要を感じこの研究に着手した。近く被服構成学研究委員会第3部において、I.B.P.と衣服学会の協同のもとに着衣調査を行なうが、その研究の下準備として当調査にあたったので報告する。

調査は女子大学生 146 名について昭和43年5月から昭和44年11月までの期間、毎月中旬に平常着、外出着、作業着、寝具及び寝衣、雨衣についての着衣状態(着衣方法、被服型、被服材料、被服重量、寒暑感覚等)を記入せしめ、タナックカードを利用して結果を整理した。

健康と体格と体感との関係については5月では健康で中肉中背の場合、体感3及び4が最も多く、被服材料の種類と被服の種類ではブラウス、スカート、セーター、ブラジャー等に合成繊維使用が目立ち、服種によって毛、もめん使用も相当数ある。その他月別による衣服重量、衣服重量と暖冷房と体感、肩と腰にかかる衣服重量の比、健康及び体格と衣服重量及び体感(全身)との関係、衿型と季節との関係、被服材料の種類と被服の種類との関係などについては目下検討中である。